

## 巻頭言

## 「ピンチ」を「チャンス」に変える

熊本県立第二高等学校長  
山本 朝昭

本校のスーパーサイエンスハイスクール (SSH) 事業は、第4期の4年目を迎えました。昨年度、文部科学省から第4期の中間評価を受け、今年度7月に「これまでの努力を継続することによって、研究開発のねらいの達成が可能と判断される。」との評価をいただきました。今年度は、本評価結果を真摯に受け止め、本校の「強み」と「弱み」を改めて見つめ直すとともに、コロナ禍で制限などが課される中で様々な事業を取り組んで参りました。本書は、中間評価やこれまでの研究開発過程で気付いた課題を踏まえ、更なる飛躍を目指す本校のSSH事業の内容をまとめたものです。

本校の第4期の研究開発課題は「科学的視点から『熊本の創造的復興』をリードする人材の育成」であり、この課題解決のために「みつめる力」「きわめる力」「つなげる力」を育むことを目指しています。昨年度末からの新型コロナウイルス感染症により、本校のSSH事業は「SSH研究成果発表会」の中止をはじめ様々な計画変更を余儀なくされましたが、このような環境であったからこそ生徒の「みつめる力」、つまり課題発見力や発想力等の向上につながったと感じています。新しい学習指導要領の改訂では、「子供たちが様々な変化に積極的に向き合い、他者と協働して課題を解決していくことや、様々な情報を見極め、知識の概念的な理解を実現し、情報を再構成するなどして新たな価値につなげていくこと、複雑な状況変化の中で目的を再構築することができるようにすることが求められている。」とあります。このコロナ禍によって、私たちの生活は様々な変化を及ぼされましたが、多くの「課題発見」の機会を得ることもつながりました。本校独自の探究科目である「スーパーサイエンス (SS)」や「グローバルリサーチ (GR)」、「アートサイエンス (AS)」において、多くの生徒が新型コロナウイルス感染症をテーマとした課題についての研究を行い、課題解決策を模索しています。

また、コロナ禍は、これまでなかった新たな取組に挑戦する機会の増加にもつながりました。会議や発表会等では、直接対面での説明を行う機会は減りましたが、Zoom等を活用することにより、より遠方、より多くの方々からの助言等を得ることができるようになりました。さらに、本校はGIGAスクール構想の一環として熊本県教育委員会で取り組んでいる「一人一台端末整備に係る先行実践校」の指定を受けたことにより、次年度以降のICT活用の取組に益々拍車がかかっているところです。

以上のように、コロナ禍は本校生にとって多くの試練をもたらした一方で、新たな成長の機会を与えてくれています。このような時代だからこそ生徒たちには、積極的に「みつめる力」を発揮し、様々な課題に気づき、新たなツール等も活用し、課題解決策を模索することで各自の成長につなげてくれることを期待します。

最後になりましたが、日ごろから御支援御指導を賜っています文部科学省、科学技術振興機構、本校の運営指導委員、熊本県教育委員会の皆様、及び各関係諸機関の皆様にお礼を申し上げ巻頭のごあいさつとします。

